

美術随想

最近のニュースから

大和文華館館長 石澤正男

アンリー・ルソー作
(右) 眠れるジブシー
(左) 熱帯地方

近頃日本の美術市場は史上かつてない盛況を呈し、人によると東京銀座の画廊群は世界最大の美術市場であるといわれている位です。それもあながち誇張ではないかも知れないと思われるのは世界的な美術商のササビー、クリスティーズ、ウィルデンシュタイン等が日本に市場を開拓し、次々に拠点を設けようとしているのが現状だからであります。そういう現象はいうまでもなく日本の経済的繁栄が基盤となっていることは明らかですが、それは資力の豊かな美術愛好家が急激に増加したというよりは、むしろ美術品を投機的投資の対象とする傾向が非常に強くなってきた結果と見られています。いわば美術の世界にもエコノミック・アニマルが横行していることを示すもので、真の美術愛好者や美術館関係者には迷惑至極な徴候といわざるをえません。

美術業界の盛況に伴って日本の業者の国際的市場に於ける活躍も最近の著しい現象といえます。近頃日本の美術商が海外での競売で落札に成功し、大きな話題となった事件が二つありました。一つは中国元時代の作といわれる染付に辰砂を併用した大形の壺を二人の日本人業者が張りあった挙句、

一億八千万円まで競りあげて、青い目の同業者たちを啞然とさせたそうです。その次はニューヨーク市にあるアメリカでは最大かつ最古のメトロポリタン美術館が同館の所蔵品として常時陳列され、多くの人々に愛されてきた数点の名作を売却し、その中の一つであるアンリー・ルソーの作「熱帯地方」を東京のある美術商が約六億円を投じて落札したという話です。この二つの話は新聞、美術雑誌はもちろん週刊誌などでも報道され、またそれにまつわる後日談が今もなお紙上を賑していますからご記憶の読者も多いことと想像します。ここでは壺の方は措いて、アンリー・ルソーの作品で私の脳裏に甦ってきた古い挿話をお伝えしたいと思えます。それに先立って申し上げておきたいことは、昨年私が新幹線の車中で偶然手にした米誌ニューズ・ウィークにメトロポリタン美術館のトマス・ホーヴィング館長の意見として、同館では所蔵絵画の中、同一作家の作品が数点もあるものはその一部を売却して、全然作品のない作家の作品を購入する資金にしたい、という方針が紹介されていました。今その雑誌が手許にないため詳しくはお伝えできませんが、ホーヴィング君の

意見に対し、やはりニューヨークにある近代美術館とアメリカ美術を専門としているホイットニー美術館の館長がそれぞれ賛否の意見を発表していました。ホーヴィング君の意見は美術館の運営に携わる者にとっては破天荒ともいえるべき暴言であり、私もいろいろ考えさせられたのでした。その時ふと以前にある米誌で読んだ話を思い出したのでした。

その話というのはニューヨーク市の郊外にあるヨンカースという、小さい町のアパートに住む一人の主婦の生活体験で、それを彼女は近代美術館宛に感謝をこめた手紙に細々と書き送ったものでした。それによると彼女は四人の子供をかかえ、いつも家事や育児に追われているまだ若い主婦ですが、三四ヶ月に一度はどうにもこうにも家事の煩わしさにやりきれなくなって、二、三時間でもいいから家庭から解放されたいという強い衝動に襲われるのです。元来美術の好きな彼女は、例の衝動に駆られていた時、思いきって子供を臨時雇いの子守に託して家を飛び出し、車でニューヨークへゆき近代美術館に入ったのですが、同館の二階にいつも掛けられているルソーの「眠れるジブシー」の前に立ち、

惹き入れられるままにその絵をじっと眺めている中にそれまでは彼女の心を重い鉛のように圧迫していたもろもろの人生苦ともいえるべきものが朝霧のように消え去り、彼女は五月の青空のような晴れ晴れとした気分をとりもどし生活への希望をとりかえすことが出来たのです。それからは例の衝動に襲われるたびごとに、彼女は時間給の子守をたのんで留守をたのみ、近代美術館に駆けつけて真直ぐ「眠れるジブシー」の前に腰をおろすことにしたのだそうです。「眠れるジブシー」はいつも彼女の精神的苦悩を美事に癒してくれる名医となったのでした。

優れた作品の鑑賞の仕方は人により千差万別といっておよいでしょう。しかし例外なくいえることは、優れた作品は必ず多くのひたむきで純真な愛人をもっているということです。ホーヴィング君は30台でメトロの館長職についた非常なやり手と聞いていますが、彼は一度でもヨンカースの主婦のような人々が他にも沢山いることを考えたことがあるだろうか、ふと私はそんな疑問を禁じえませんでした。(2月11日)

季刊 美のたより No.23

昭和48年3月1日

発行 大和文華館